

# 和

平成18年5月31日(水)  
No. 16  
文責：北澤

市浦小学校5年学級通信

## リレー作文

なな

黒いコートを着た男の子がいた。ぼくは、その男の子に、「ここはどこなんだい？教えてくれないかなあ。」すると、その男の子はとつぜん、「ピカんと来たぜー!!!」

とさげんだ。ぼくは、おどろきのあまり、後ろに転んでしまった。そうすると、その男の子の頭がピカァーと光った。その明るさはすごかった。ぼくは目をくらませた。そのいっしゅんの時、男の子はどこかへ消えてしまった。

(あの男の子はなんだったんだろう。)

とぼくは思った。すると、とつぜん八メートルくらいのでっかい鳥が飛んできて、ぼくはその鳥につれさられた。すごくびっくりして、意識が遠くなった。目を覚ますと、そこは映画館だった。あの鳥にふりおとされたらしく、ぼくの頭にはたんこぶができていた。映画館から出ると、そこは・・・



つばさ

公園だった。後ろをむいたら、いつの間にか映画館ではなく、高いビルが建っていた。中に入ると、エレベーターがたぐさんならんでいた。上にのぼろうとすると、エレベーターから自分のクラスの友達だけ出てきた。

「助けてえ〜。」

ぼくは友達を見て、

「どうしたんだ。」

すると、後ろから何かがぼくを、どんとおした。ぼくはつまづいて、転んでしまった。立ち上がると、もうそこは、三

億三千七十二かいだった。

となりを見ると、サングラスをかけた男が一人いた。すると、エレベーターが止まったらそこは、三億七千三かいだった。ドアが、ダンとあいた。すると、ぼくの友人、七人がサングラスをかけているおっさんにとびかかった。ぼくは、そのすきに外に出た。でもそこはさっきの公園だった。後ろをむいたらまた、高いビルが建っていた。前を見ると、小屋が建っていた。中に入ると、うるさい音が、「カーンキーンガーギーン。」

と鳴った。ぼくは気絶してしまった。目をあけるとそこは、ぼくが通っていた学校の前庭

だった。目の前には、鉄ぼうがあった。ぼくは、さか上がりのことを思い出した。

「やってみるか。」

ぼくはやった。すると、

「一回、二回、三回。」

ぼくは、三回連続さか上がりができた。すると先生がきて、

「パチパチパチ。」

とはくしゅした。ぼくは自分が、

「すごい。」

と思った。

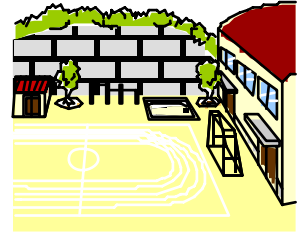
今までの何だったんだろう。ぼくは、不思議に思った。教室にいて先生に、「あの七人は。」

と聞いた。

「たいほされたよ。マリオとルイージをやっつけたから。」

「じゃあ、さっきのおっさんは、マリオかルイージだったんだなあ〜。」

それから一ヶ月。前と同じような学校生活になって、もうぼくはあのことをわすれてしまった。その時・・・



北澤

ガラッ。満面の笑みをうかべた先生が、教室に入ってきた。

「まとめの時期ですね。授業で、鉄ぼうのテストを行います。みんな、がんばって。」

「えー。」「うそー。練習してないよー。」

ザワザワ。一気に教室がさわがしくなった。

(鉄ぼう。逆上がり。ぼく、できるかな?)

そんなことを考えていると、ふと頭の中に、あのときのぼう険がよみがえってきた。思えば、逆上がりができなくてしょんぼりして帰ったあの日、マンホールに落ちて、いろんな出来事があったが、ぼくは様々なこんなをのりこえた。そして、逆上がりもできるようになったんだ。だから、鉄ぼうのテストもだいじょうぶ。

ハチマキをギリッとしめた友達にまじって、ぼくもグラウンドに整列した。一人、二人と見事に逆上りを決めていく。次はいよいよぼくの番。よ〜し、いくぞ!!!

リレー作文おわり

ほぼ一ヶ月にわたって、朝のスピーチタイムで作文を発表してもらいました。子どもたちの書く作品は、ユニークかつ想像の翼がどこまでもはばたいていたように感じます。毎朝、みんな目を輝かせて聞いていました。正直、突拍子もない方向へいってしまうのでは?という心配もあったのですが、(決して指定したわけではないのですが)『鉄棒』という基本線はずれることなく、最後のつばさくんまで見事にまとめてくれました。書いてきた作文の掲載に関しては、誤字・いいまわし等以外、担任の手はほとんど手をくわえていません。子どもたちの息づかいそのものです。運動会同様、見事にバトンをつないで完成させた作品に、心から拍手です。

リレー作文、またチャレンジしてみたいです。